

## 「真言密教の現代化」をめぐる

小山典勇

Q) 現代とは

現代をどのように捕らえ、時代をどのように予測するかは難問ではあるが、現象的な事象を手掛かりとすれば、国際化・情報化が経済分野からはじまり文化・宗教にいたる生活全般に浸透し、しかもマスメディアを通じて多種多様な価値観があふれている。それらの情報を適切に読み取る術があるだろうか。つまり自分自身を確認する手立てが問われているのである。一地方一地域なら通用した富を得る、名誉を得るという自分を確認する目安である従来の価値は相対化してしまった。

さらに国内では二十一世紀を待たずに高齢者社会の問題にあふれている。「美しく老いる」幸せな老後は夢であったのであり、「老の問題」「病の問題」が顕在化した。複数世代が同居する生活から、核家族化が進み、家庭の中だけではなく、地域社会や職場における人間関係に歪みが生じている。本人にとっても家族にとっても地域社会にとっても深刻である。老と病とそれともなつての死の問題は、交通事故死、ガン、過労死などを特徴としている。高度経済

「真言密教の現代化」をめぐる

成長期それに続くバブル経済期で消されていた老・病・死の問題が、個別の問題ではなく、国民すべてに共通する問題として浮上している。すなわちどのようなように生きそして死んでいくかを自分自身で答えをみつけないければならない。戦前であれば、お国のためという死の名分があったが、今の私たちは「死ぬために死ぬ」という時点にいる。

見方を変えれば、他人のために自分を犠牲にするという気持ち失われている。3Kに代弁されるように生活が機械化され簡便になり、豊富な物で代用できるからだろう。さらに、受験戦争で、職場では出世争い・業績争いで、他をいたわり・他を慈しむ経験が乏しいからだろう。したがって自分自身の問題として、人間関係、すなわち社会の一員としてどうあるべきかを問うことだ。人間関係は常に他との比較・競争であり、勝者としても敗者にしても、相互の心の奥底に疵がついている。そのような不安は歴史をさかのぼれば怨念であり、やがて怨念は怨霊となって再生し、社会全般に息づいてくる。

総花的にいえば、膠着状況にある政治のように、私たちの生き方も膠着状況にある。そこから生じる不安（はつきりと理由が分からない不安）に躍らされ、あるいは目的意識をもった人々が、多種多様な宗教に救いを求めている。宗教と人間、この素朴なテーマがそのままこれからのキーワードとなる。中でも宗教的には怨念、怨霊の問題にどのような関わるかが問われるにちがいない。

「つくしあい運動」に照らせば、高度成長経済の時代にあつて、物欲に流されない自分を見いだすという視点は尊重されるべきであるが、それだけに高度成長の先にある物欲的な充足感が精一杯生きる・つくしあうという表現で安易に置き換えられたのではないか。浄土真宗的な罪業を説かない真言密教の教理的な体質も大いに関係しているだろうが。

Q) 住職の意思表示、寺院と檀信徒のあり方

総合調査によれば、寺院と檀信徒は、うら盆・施餓鬼会に代表される先祖・墓地を媒介としている。檀信徒と寺院との結びつきは五〇年以上の関係にある人が多い。菩提寺・住職に対する希望は「特にない」が半数に達する。つまり葬式のときだけ菩提寺を意識するといって過言ではない。この三〇年間に檀家となったケースも葬式を媒介としている。しかし新しい檀家は菩提寺の関心度が五〇年以上の人とは異なる。つまり形骸化していない檀信徒がおり、その関心に方向づけ・意識づけをすることが教化活動の目的だろう。

戦後、高学歴化が進み、経済的な余裕もあり、檀信徒の知的な関心や巡礼などの宗教的実践も広がっているが、なぜか、菩提寺に集約されるに至っていない。そこには寺院の経済基盤の弱さから住職が対応しきれない事情もあるが、それだけだろうか。

寺院にはそれぞれに歴史や伝統があるが、権威主義や慣例第一でマンネリ化に陥っていないだろうか。権威主義、慣例第一の最たるものは儀礼、年中行事であり、また葬儀である。年中行事のうら盆・施餓鬼会も、新盆を除けば、中止も休止もできない消化事業の感がある。祖先信仰が希薄化しているともいえるが、檀家は腹の中に隠して、一般の人々はそこに宗教性の希薄さを感じているはずだ。家の宗旨から個人の信仰へのキャッチフレーズはともかく、実態は、相変わらず行事中心であったところに伝統教団の信仰運動の限界があった。

菩提寺と檀信徒に焦点を当てても、問題の所在は上記のようで、この事情は少なくとも明治維新期におけるキリスト教の解禁、西欧近代主義の出会いで当面した問題をそのまま引きずってきたといえる。このことは後の課題である。

## a) 儀礼の功罪

当面する問題は、宗教性をどのように回復するかである。

真言密教はその宗教形態として、祈りという内面のありようを「加持・祈禱」という形式・儀礼化した。形を見て参加者は感動し、各自の内面にある祈りを開発した。このように心と形について補完的・両義的なダイナミックな仕組みをもっている。儀礼に参加する、拝む姿、読経の声に感動し、宗教に目を開くチャンスとなることは確かである。

ところが、形式・儀礼は一度成立すれば、それを順守することに意義があることからマンネリ化を避け難い欠点がある。心をよそにして上辺だけで葬儀に参列するなど参列者・檀信徒の意識や姿勢にも問題はある。また先例にならぬ、阿闍梨の指導に従うことは必要ではあるが、それがマンネリ化すると、先例や阿闍梨を絶対視し、批判をしない。批判を許さない雰囲気が生ずる。心と形は表裏一体であるはずなのに、伝統を墨守するだけで創意工夫が試みられない結果となる。そこで伝統を棚上げしてイベントの名の下に儀礼は衣替えをしてきている。なお年中行事を見直そうという意識は「これからの寺院行事」に結実している。

ところで加持・祈禱は一般には呪法・呪術とおきかえられる。葬儀においてもご祈願においても呪術は悪魔を退散させ障りを除く。それは善を生み柔に導くものである。我々はそこに霊的な存在を予想し、霊的な世界と交渉する技能を備えていることになっている。前述のように思い当たらない不安に対しては言葉による説得は効果が薄い。呪物、呪法がものをいう。このことは水子の相談に対して、拜んで対応するという住職の反応に端的に現れている（地区教化研究会の結果から）。呪術・呪法・呪物を基盤にした儀礼と即身成仏義と人間の心理機構を解明した十住心論

を両目でにらみながら、自分自身の宗教基盤を再確認していくべきだろう。

しかし、問題はそれだけでは片付かない。不安は気分的であるから、一時しのぎはできても再発する恐れがある。

b) 法話の功罪（ご詠歌、寺だよりなど教化活動を代表する用語として）

明治時代に、政府から寺領を収奪されて経済的基盤を失い、キリスト教が解禁されてライバルが現れると、伝統教団特に真言宗は経済的支援を檀家に仰ぐことになり、檀家から浄財を募る方法として布教が宗団の課題となった。布教とは、真言宗の教えを言葉で説明することである。真言宗の教えの要点を何にするかで「安心」が問題になった。真言宗、修験道がなくなってきた医療行為も含めて加持・祈禱は、西欧医学から、近代合理主義から、邪教視された新宗教の出現などから、人々ばかりか住職の意識から浮かび上がった。また宗団としては法流が事相・教相に分離したことも影響している。

檀信徒に対して「言葉で働きかける」というシステムがない所から出発した。その点はハンディキャップはあるが、儀礼のもつ権威・伝統よりも住職の意識・能力が左右する。誰もが喋れるわけではないから、住職の個性が問われる新しい問題となった。このことは伝統や権威の上に成り立つ伝統教団に活を入れる意味がある。智山教学の著作は、大師の著述に関する解説で成り立って来ているが、今では「大師のお言葉」を初めとする解説書がおびただしく出回っていることも上述のように明らかである。

しかし、宗内では勉強するから教相、声がいいから事相、話がうまいから布教という色分けができあがった。宗教という一人の人間の全人格的な問題が、初めから技能別に限定する見方ができたのである。布教師資格がそれを物語っている。

法話は法話だけで完結していくことを考慮しなければならない。このことについて若干記しておきたい。

法話をするには事前の勉強が必要である。また事後の反省も重要である。学ぶことがたくさんあることに気が付き、さらに精進する意欲を起こさせる。この意味で法話は任職の内面を向上させていく。

法話を聞く人は、話者の問題提起を理解し、共鳴し、自分の問題を発見する。儀礼で感動を覚えるように、法話で感銘する場合もあり得る。そして問題提起を媒介に個人的なつながりが深まり、法話から次への展開もはじまる。

法話は、現代の問題を取り上げる批判精神や観察力、また論理的・整合性のある内容にする構想力も問われる。しかし、それ以上に檀信徒・聴衆に語りかけようとする意欲・パワーに注目すれば、法話とは「言葉による儀礼」といえるだろう。落語や講談が法話研究に注目されるゆえんである。たった一言でその人の人生が変わるのだから。

少なくとも教化伝道が任職の全人格を費やしての営みであるならば、原則的には、自分の立脚点を宗教的に模索し、また現代社会の一員として自分を考え、対人・対社会との接点を模索していくとすれば、任職の原点に立ち返るという視点が現代化を問う第一のカギではないか。